

佳作

## 「トバのキセキ」

東京都 共栄学園高等学校三年 新村 真由乃

言葉には、不思議な力が宿っています。

好きな人に「可愛いね」、「綺麗だね」と言われるうちに、本当に可愛くなったり、綺麗になったりするという話を耳にしたことがあります。

本当にそんなことがあるのでしょうか？可愛くなりたくて、綺麗になりたくて、努力している人はたくさん居るのに、ただ言葉をかけてもらうだけで美しくなるのなら、安いものですよね。そんなにうまくいくわけがありません。

そう私は思っていました。

高校に入學し、しばらく経った秋のころ。突然、激しい腹部の痛みに襲われ、倒れこみ、病院へ行きました。CTや血液検査、超音波検査など、様々な検査を行った結果、私の身体は手術が必要なほどの大きな病気に蝕まれていることがわかりました。

今、改めて考えれば、大袈裟だったかもしれない。そのときは、聞いたことのない病名に恐怖を感じ、内視鏡を使って簡単な手術だというのに「最悪の事態」を考えてしまい、心も病んでしまいました。その病気の理由や原因は、お医者さんに聞いてもインターネットや本を調べても、はっきりとはわからないのです。対処も、避けることも、自分の力ではなにもできません。この病気は、誰もがかかる可能性のある病気なのです。何故病気は私を選んだのでしょうか？

検査をする前から私の中に存在していたはずなのに、まるで昨日までの身体と今日の身体が違ふかのように感じました。私のお腹、この中に病気がいる……そう思うと、寝返りを打つことさえ怖い。痛みや恐怖に苦しむ日々。体力はそれだけで消耗し、好きなことも、やりたいこ

ともできません。悲観に暮れていました。

症状は徐々に悪化し、学校も休みがちになりました。休むたびにお見舞いに来てくれたり、電話やメールをしてくれたりした友達も、もう居ません。（そもそも、休む頻度が多すぎるので、毎回そうしていたら大変です。）見捨てられもします。私は居ても居なくても同じ。空気のような存在になってきたでしょう。

私の存在ってなんなのでしょうか……。

ある日のこと。学校でぐあいが悪くなった私は、保健室へ向かいました。ベッドで横になれば楽になることもありませんが、今回の症状は酷く、早退を余儀なくされました。

よくあることです。授業中、静かな空気の中教室に入り、鞆や教科書を取りに行く。最初は恥ずかしかったものの、もう慣れました。

重い身体を引きずるようにしながら教室に入り、荷物をまとめる。いつもなら平気そうな顔をしてみせるものの、青ざめた肌、ふらつく足元、湧き出る冷や汗……隠し切れないくらい症状は酷かったのです。

先生に軽く会釈をし、帰ろうとしたその時、

「大丈夫？」

「気をつけてね。」

「お大事に！」

些細なことでした。クラスメイトの多くが、そう声をかけてくれたのです。私は、喋ることさえも辛く、その言葉に何も返すことはできませんでした。

皆が、本当に心配してくれていたのか、その場の雰囲気や「なんとなく」で言ったのか、どれだけの想いを込めて私に声をかけてくれたのかはわかりません。ですが、私の中に暖かな

ものが広がってゆくことを感じました。すごく苦しい時、すごく困っている時、かけてくれたその言葉。このままでは、きっと、気がつけませんでした。「私はここに居る」ということを、皆はわかってくれていたのです。それが例え「なんとなく」でも、暖かな言葉をかけてくれる人が私の傍にたくさん居るということ、それぞれのものが幸せなのです。

その喜びは、私の身体にはっきりと現れていきます。一度は手術をしなければ治らないと言われた病気も、大事に至らず、奇跡的に回復へと向かっているのです。

冒頭で書いた話も、嘘ではないと思います。好きな人に「可愛い」、「綺麗」と言われること。それはきつと、とても素敵なことで、その言葉はキラキラと輝いて、心も、身体も、美しくなってゆくのでしょうか。

誰かのたった一言は、自分の世界を大きく変えてくれます。一つ一つの素敵な言葉を、素直に、大切に受け止めること。それはきつと、貴方を幸せへと導いてくれるはずです。